



Title	日本語母語話者は第二言語話者との会話をどのように評価するか
Author(s)	小池, 真理; Koike, Mari
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 7, 16-33
Issue Date	2003-12
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/45635">https://hdl.handle.net/2115/45635</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	BISC007_002.pdf



## 日本語母語話者は第二言語話者との会話を どのように評価するか

小池 真理

### 要 旨

本稿は、日本語第二言語話者との会話に参加した日本語母語話者が、その会話をどのように評価するかを調査した。調査は非構造化質問で始める半構造化インタビューを使用し、調査者の視点の影響を極力排除した。

調査によって得られたプロトコルを分析した結果、日本語母語話者は文法、発音、談話構成など個別に分類された項目に注目するのではなく、円滑に流れるコミュニケーションを妨げるものに注目する傾向にあることがわかった。ここで会話の流れを妨げるものとして、(1)第二言語話者の発話及びターンテイキングに関する予測、推測のしにくさに関わる要素、(2)理解や興味を推測しにくくする要素、(3)会話を継続するための話題の発展が不十分なこと、が挙げられた。以上から、母語話者が第二言語話者を共に会話を進める相互補完の相手としてみなし、第二言語話者の言語表現及び表情、ジェスチャー、視線などの非言語表現を手掛かりとしてコミュニケーションを遂行していることが伺えた。つまり、(1)から(3)のような補完作業の妨げになる要因に関して会話しにくさを感じる傾向があることがわかった。

〔キーワード〕 母語話者評価、会話の参加者、会話しやすさ、相互補完、半構造化インタビュー

### 1. はじめに

従来より日本語教育の現場においてコミュニケーション能力の獲得を目的としたシラバスの作成は、日本語教師（以下、教師）自身の経験に基づいた内省によって行われてきた。しかし、コミュニケーションを支える要因は多岐に渡っており、それらの要因を様々な視点から分析し、さらにそこから取捨選択して、シラバスを再構築する必要がある。近年、日本語

教育の分野において「何を」教えるかの再吟味の作業の遅れを指摘し、シラバス再構築に向けた研究が行なわれてきている（小林2000、他）。この再構築のためには、教師の内省のみならず、日本語第二言語話者（以下、L2話者）が実際の社会生活の中で接触する一般の日本語母語話者（以下、母語話者）の視点を取り入れる必要がある。そのために、母語話者がL2話者との会話をどのように評価するか、その実態を把握しておくことが重要となる。

教師はL2話者に対して日本語教育を行っているため、縦軸思考でL2話者の日本語能力を考える傾向にあると考えられる。つまり、母語話者の日本語を最終到達目標として、L2話者の日本語能力はどの程度なのか、どうしたらより高いレベルに引き上げることができるか、といった縦軸に沿った捉え方である。そこにはL2話者は不完全な日本語話者であるという考え方が根底に存在する。しかし、日本語教育に携わっていない母語話者は多くの場合、会話の相手であるL2話者がどのぐらいの日本語レベルか意識して会話をしていないことが予想される。つまり、母語話者は会話を行うL2話者に対して、彼等の日本語レベルを縦軸に沿った序列の中に当てはめ、このレベルならこの程度の語彙や文型がわかるという認識をするのではなく、個々のL2話者との会話の中でその状況や流れに応じて、コミュニケーションを遂行していると言えよう。したがって、母語話者がL2話者と円滑なコミュニケーションを遂行するために、何が有効で何が問題であると感じているかを明らかにし、日本語教育に還元することは重要なことであると考えられる。そのためには、母語話者によるL2話者との会話に対する評価を調査することが必須である。ただし、ここでいう評価とは、教育現場で使用している到達度の測定や教育効果測定などの狭義の意味の評価ではなく、印象、感想といった広義の意味の評価である。

## 2. 先行研究

近年、日本語教育の分野でも母語話者評価に関する研究が行なわれてきている。しかし、ほとんどの研究でL2話者の日本語運用を録音したテープ、また録画したビデオを刺激として、母語話者にL2話者の日本語を評価させる手法が採用されている（Okamura1995、西郷1997、小池1998、2000、原田1998、2001、河野1999、河野等1999、石崎1999、渡部2001、2002）。すなわち、評価者である母語話者は、実際にL2話者と会話を行うのでは

なく、テープレコーダーからの音声や、ビデオの映像によって評価しているのである。これは、母語話者評価に関してある種の知見を示すことができるが、実際の社会生活では第三者がL2話者の会話を評価することは日常的なことではない。また、会話相手が教師である研究が多く、L2話者の日本語レベルに応じて会話を行う可能性がある。さらに、評価方法においては、調査者が作成した質問紙による評定尺度が使用されている研究が多い (Okamura1995、深尾1996、西郷1997、石崎1999、渡部2001、2002)。これらの研究では、母語話者の評価が、例えば、文法、流暢さといった調査者が既定した調査項目に限定されている。

以上のように先行研究には、主に五つの問題点が存在する。まず、実際にL2話者と会話した母語話者の評価が明らかにされていない。第二に、母語話者の評価が調査者により既定された評価項目に限定されている場合、調査者と異なった視点を探ることが不可能である。第三に、質問紙による評価方法では、母語話者自身の言葉で説明されていないため、使用されている評価項目、例えば、文法・発音・流暢さ、といった項目を母語話者がどのような認識で捉えているか不明である。第四に、評定尺度使用の場合、5段階、また6段階の尺度における評価基準が個人により異なり、統一されていない可能性がある。第五に、刺激用に作成されたテープ、ビデオにおいて会話相手が教師である場合、L2話者の日本語レベルに応じて使用文型や語彙を調整する可能性がある。そのため、これらの会話は、実際の生活における母語話者との会話とは明らかに異なったものになり得るわけである。したがって、今後の母語話者評価研究では、これらの問題点を解決し、新しい知見が得られる調査方法、評価方法が求められる。

そこで、本研究では、L2話者と実際に会話を行った母語話者による評価を調査した。さらに、母語話者自身の評価視点が明らかになるように、半構造化インタビューを採用し印象を自由に語ってもらった。

### 3. 研究の目的

L2話者との会話に実際に参加した母語話者が行った評価のうち、特に以下の二点に関して考察を行う。

- (1) 実際に会話したときの評価とそのビデオを視聴した時の評価にどのような差が生じるか。そして、その差はどのような要因が関係して生じたのか。

- これは、コミュニケーション遂行に注目した会話時に母語話者が何に注目するか、そして何を行っているか明らかにするために重要である。
- (2) 母語話者が会話しにくい、またしやすいと感じるのは、どのような時なのか。そして、それはどのような要因が関係しているのか。

## 4. 調査方法

### 4.1 調査時期

2002年の7月と9月の2回調査を実施した。

### 4.2 調査参加者

日本国内の大学の日本語を母語とする大学院生7名（男性3名、女性4名：22～29歳）と同じ大学のタイ語を母語とする大学院留学生14名（男性7名、女性7名：22～32歳）である。母語話者は、日本語教育専攻ではなく、日本語教師経験もない。なお、母語話者とL2話者は、調査時に初対面である。調査参加者のプロフィールを表1に示す。日本語レベルは大学院留学生が参加した日本語クラスを基準にした。中級は初級教科書を終了したレベル以上であり、上級の二人は大学の中級クラスを終了した留学生と上級クラスに参加した留学生である。

L2話者をタイ語母語話者に限定したのは、母語や背景文化の相違による影響を最小限に抑えるためである。

表1. 調査参加者プロフィール (NS=母語話者、SLS=L2話者)

母語話者	性別	年齢	L2話者	性別	年齢	滞日期間	日本語レベル
NS1	男性	29歳	SLS1	男性	26歳	3.4年	中級
			SLS2	男性	26歳	4.3年	中級
NS2	女性	22歳	SLS3	女性	28歳	0.75年	初級
			SLS4	女性	25歳	0.75年	初級
NS3	女性	23歳	SLS5	女性	27歳	3.75年	中級
			SLS6	男性	27歳	3.5年	中級
NS4	男性	24歳	SLS7	女性	32歳	4年	中級
			SLS8	女性	26歳	2.4年	中級
NS5	女性	28歳	SLS9	男性	24歳	3年	中級
			SLS10	男性	26歳	3年	中級
NS6	女性	26歳	SLS11	女性	24歳	3.5年	上級
			SLS12	男性	29歳	10.3年	上級
NS7	男性	25歳	SLS13	女性	23歳	1.9年	中級
			SLS14	男性	22歳	1.9年	中級

## 4.3 調査の手順

### 4.3.1 調査参加の依頼

調査への協力を依頼し、同意書への署名、及びフェイスシートへの記入をしてもらう。

### 4.3.2 母語話者とL2話者の会話

各母語話者は2名のL2話者とそれぞれ会話を行ない、母語話者が7名で合計14組の会話となった(表1)。各母語話者が会話する2名のL2話者に関しては、在日期间、学習歴、履修日本語クラスなどから判断して、日本語のレベルに大きな差が出ないように配慮して、組み合わせを行った。母語話者が複数のL2話者の日本語を評価するのは、比較により評価の違いがあるか見るためである。

会話は、自由会話20分と「依頼」のロールプレイである。依頼の内容はL2話者だけに知らせ、母語話者には知らせていない。会話中は、参加者2名が入る角度とL2話者の顔が正面になる角度の二方向からそれぞれデジタルビデオカメラと8ミリビデオカメラで録画した。

### 4.3.3 母語話者へのインタビュー

半構造化インタビューにより、母語話者に2名のL2話者との会話に関する感想や印象を話してもらった。半構造化インタビューというのは、標準化されたインタビューや質問紙を使用したときより回答の自由度が高いもので、調査対象者の視点をより明確にするものである(ウヴェ、2002)。このインタビュー方法には種々のタイプがあるが、本研究では「会話はどうでしたか」というような非構造化質問ではじめ、それに対する回答に応じて特定の項目に焦点をあててインタビューを行う焦点インタビューを採用した。

まず、2回の会話終了直後に自由に話してもらった。最初に「会話はどうでしたか」、「印象を話してください」といった質問でインタビューを開始し、この質問で個々のL2話者に関する感想が出ない場合、「二人を比べてどうですか」という質問を行った。

次に、録画した会話のビデオを視聴して同様にインタビューを行った。視聴個所は、それぞれのL2話者との会話の自由会話の最初の部分3～5分と後半部分3～5分、さらにロールプレイの全部である。母語話者がビデオを視聴しながらコメントを始めた時以外は、それぞれの箇所の視聴後に「何か感想がありますか」と尋ねた。

インタビューは著者自身が一人で行った。インタビュー時間は平均一人1時間程度であり、デジタルビデオカメラで全て録画した。

#### 4.4 文字化データ作成

会話及びインタビューの録画データの文字化を行った。

### 5. 結果と分析

#### 5.1 会話直後のコメント

##### 5.1.1 全体的なコメント

会話直後のインタビューで印象を尋ねたところ、「話しやすい」という表現がキーワードとして現れていた。以下に母語話者のコメント例を示す。発話者は表1で使用した母語話者番号を使用した。

- (1) 共通の話題があると話しやすい。(NS 1)  
「すごく話しやすかったですね。お互いに共通していたのが、やっぱりサッカーが好きだっていうのがあったんで」(NS 1)
- (2) 話の流れが止まらないと話しやすい。(NS 1、NS 5)  
「SLS 1さんのほうがうまいかなあって言う感じがしました。話の流れが止まらないんですね。話がうまくいっている」(NS 1)
- (3) わかった顔をしてくれると話しやすい。(NS 7)  
「一緒に話していて、こっちの言うことが分かってくれる顔をしてくれるんで、ああ話しやすいんだなっていうのがね」(NS 7)
- (4) 理解できないことを何度もすまなそうにされると、話しにくい。(NS 2)  
「なんか本当にすまなそうに、わからないことをすまなそうにしているんで、ごめんなさいみたいな感じで、それでちょっと」(NS 2)
- (5) 相づちや頷きが一方通行な感じがする。(NS 3)  
「日本人と話している時より、頷きとか相づちが一方通行な感じがする」(NS 3)
- (6) 会話がだぶったり、間があくと話しにくい。(NS 5)  
「NNS 9さんのほうが話しやすかったかなって。会話がだぶっちゃったり、一緒にひいちゃったりすることがなかったというか。ぶつかると、間があいちゃうじゃないですか。」(NS 5)
- (7) 相手の反応がいいと話しやすい。(NS 7、NS 1)  
「話しやすいのは、相手の反応がいいって言うんですかね。僕はこう

なんですよ、あ、そうですか、でもねっといった、返答ですかね。」

(NS 7)

- (8) 日本語が上手だと話しやすい。(NS 6、NS 7)

「SLS11さんのほうが、話している内容というより、雰囲気、雰囲気というかなんでしょう。なにか流暢な、流暢な雰囲気」(NS 6)

- (9) 学習者が止まると話しにくい。(NS 2、NS 4、NS 7)

「最初に、私が、とか言って、その後突っかかれると、何を予想していいかわからないから」(NS 4)

### 5.1.2 言語項目に関するコメント

7名中4名からは言語項目に関するコメントは一切なかった。コメントをした3名も以下のように、言語項目に関する問題点があっても、コミュニケーションには問題がなかったと述べた。

- (1) 助詞の誤りや脱落があるが、聞くには問題がない。(NS 2、NS 4)

「そこは『が』じゃないかなってところが、『は』を使うだったりとか、そういうのはちょっとありましたけど、困らないですね。」(NS 2)

- (2) 文法の誤りがあったが、わかるのでいい。(NS 4)

「『迎えに行きますか』行ってくれますかなのかなってというのが、行きますか、とか。ちょっと敬語が違ったのかな。直しても失礼かなって、わかるからいいかな。」(NS 4)

- (3) 発音が違うが、聞き返せばわかるので、問題ない。(NS 4、NS 7)

「白子って言う単語が『ちらこ』になってて、うん?と思ったんだけど、まあ白子かなって思ったら白子で。」(NS 4)

## 5.2 ビデオ視聴時のコメント

### 5.2.1 会話直後とビデオ視聴後のL2話者の発話に関する印象の差

会話のビデオを視聴しながら行ったインタビューで、会話直後に持っていた印象とビデオ視聴時の印象に差を感じたというコメントが7名中4名から得られた。その中でL2話者の発話に関する差に言及したコメントが4名から、非言語表現に関連したコメントも4名から得られた。以下に母語話者のコメント例を示す。

〈言語表現に関して〉

- (1) 思ったよりL2話者の発話量が少ない。(NS 3、NS 4、NS 5)

「思ったよりしゃべっていなかったんだ。私がたくさんしゃべっていたんだなって思ったんですけど」(NS 5)

- (2) L 2 話者の発話文が思ったより短い。(NS 3、NS 4)

「こうやって見てみると断片的に話していて、私がそれを頭の中で繋げて聞いていたんだなって思いました。」(NS 3)

- (3) 思ったほど上手じゃない。(NS 2、NS 5)

「なんかわからないところがあったのかなあと思いましたね。こうして見ると、ずいぶん大変そうだったですね。」(NS 2)

- (4) 思ったより母語話者が補足している。(NS 2、NS 3、NS 4)

「結構、僕が言い直しているのが多かったかな」(NS 4)

「(L 2 話者が) 言う前に言っちゃてるかな」(NS 2)

#### 〈非言語表現に関して〉

会話中には意識しなかったL 2 話者の非言語表現が自分の印象に与えた影響に関して言及した母語話者が以下の4名である。

- (1) 思ったより手振り、身ぶりが多い。(NS 2、NS 3)

「手をよく使うんですね、話す時。常に手が動いていたんだなあって。だから、より活発に一杯しゃべっていたような気がしたんですね。」(NS 3)

- (2) 体の位置が印象に影響を与えている。(NS 5、NS 6)

「今見て思ったんですけど、椅子の座り方なんですけど、SLS12さんは、後ろの方にいる感じがあったので、そのような様子からも印象を受けたんだと思います。」(NS 6)

#### 5.2.2 会話のしにくさ、しやすさに関するコメント

会話直後のインタビューにおいても5.1.1で示したように「会話しにくい、会話しやすい」というコメントが得られたが、ビデオ視聴時のインタビューでは、より具体的に、またより多くの母語話者から同様のコメントが得られた。ただし、インタビューでは、「会話しやすい」、「話しにくい」という表現を使用した質問は一切行っていない。母語話者自身が使用した表現である。

母語話者がL 2 話者との会話において困難さや疲れを感じた要因は主に(1)話題の発展の不足、(2)接続詞の欠如、(3)発話の停止(ポーズ)、(4)談話の終結の不明瞭さ、(5)相づち・頷きの欠如、(6)非言語表現の不足、(7)不明瞭な発音の多さ、の7点であった。以下に母語話者のコメント例を示す。

- (1) 話題の発展の不足 (NS 1, NS 4, NS 6, NS 7)

「ただ聞いているだけじゃなくて、反応返してくれるんで、こっちとしても会話をつなぎやすい。SLS 2は、こっちが話題振っても、終わったりするんですよね。だから、またこっちから何か新しいものを投げないと」(NS 1)

- (2) 接続詞の欠如。(NS 2, NS 3, NS 4)

「接続詞があまりなかったから、だからその前後関係とか因果関係とか、考えながら聞かなければならなかったかなってところで、疲れたのかもしれないです。」(NS 3)

「切れた時にぶつって切れてるから、つかかてるのかなって思ったんだけど、全部マル(筆者注：句点のこと)で終わっている。それで、で、来るから、そういうので繋がっていけば、もっとスムーズにいくのかも。前と後がどう繋がっているか微妙で。(切らずに)流してくれた方がわかりやすい」(NS 4)

- (3) 発話の停止 (NS 1, NS 4, NS 5)

「会話のターンが取りやすかったという感じがしますね。なんか会話がだぶっちゃったり、一緒にひいちゃったりすることがなかったていうか。」(NS 5)

「最初に、『私が』とか言って、その後つかかれると、何を予想していいかもわかんないから。」(NS 3)

- (4) 談話の終結の不明瞭さ (NS 2, NS 3, NS 6)

「どうやってあのロールプレイを終わろう、終わらせればいいのかって考えながら、話してたころだったので、ちょっと気を取られているような感じもあったような気がします。両方とも。普段でも私は、電話をして、どこで終わらせればいいのかと考えるタイプなんで。」(NS 6)

- (5) 相づち、頷きの欠如 (NS 3, NS 4, NS 5)

「なんかあいづちの感じとかが彼はすごい。相づちの感じとかが違う外国の人っていますよね。なんで、えっほんとに分かっているのかなっていうことがわかんなくて心配になる時があるんですよね。」(NS 5)

- (6) 非言語表現 (NS 1, NS 2, NS 4, NS 5, NS 6, NS 7)

「アイコンタクトがあまりないんですよね。だから、やっぱりちょっと話しづらいついていう部分があるんですよね。」(NS 1)

「にこにこしていらっしやる。こっちも嬉しいっていうんですかね。SLS14さんのほうは、ちょっと困っているような顔されているので、こっちもちょっと困ってしまうような気がしますね。」(NS7)

(7) 不明瞭な発音の多さ

「だから、わからないのは、聞き返してわかればどうにかなるから。それやっぱ多すぎるとね、コミュニケーションが」(NS4)

### 5.2.3 その他のコメント

個々の言語項目に関しても5.1.2と同様のコメントが6名の母語話者から得られた。だが、同様に「間の助詞がなかったりとかすることもあ  
るけど、聞く分には全く問題ないと思います」(NS4)と述べ、コミュニケーション上は重要視していないことが伺えた。また、発音に関して、予測の範囲内であったり聞き返して確認できる発音の誤りであれば、問題ないと言っている。つまり、いわゆる文法、発音といってもその中の要素の質と量によって重み付けが異なっている。したがって、従来のように文法、発音に含まれる要素を一括して捉える分類の仕方では、母語話者の評価が分析できないと言える。

以下に母語話者がコミュニケーション上重要である点として言及したコメントを示す。

- 「詳しい理由はわからないんですけど、いろいろな要素が組み合わさって、それで滑らかに聞こえたんじゃないでしょうか。」(NS6)
- 「たぶん対面で会話していると、多少の間違いは全然気にならないですね。」(NS6)
- 「文法間違いで気付いたほうは、SLS8さんのほうが多かったけど、トータルで やりやすいのはSLS8さんのほうが、やりやすい、かな。言っていることは全部わかって、予想も出来る範囲、やっぱ顔の表情があるから、わかりやすいし、文章が切れてないから、つながってたから、わかりやすいっていうのがありました。」(NS4)
- 「何がくるか、こっちも予測できるから、そんなに節々に注意しなくても。あんまり言葉の、なんていうんだろう、形式的にとこに注意はしないもんなんだな、と思いました。」(NS3)
- 「話をスムーズに行かせるために、相づちがあるかどうかとか、だから笑顔って言うのも、話をわかってくれてるかどうか、ってこっちが判断するために。そういうスムーズに行かせるために、笑顔とか、相

づちとか、向こうの接続詞とか、あと切れないほうがいいかなって。」

(NS 4)

### 5.3 実際の会話の検証

母語話者が言及したコメントが会話の中で実際に起きているか検証を行う。会話の発話はプライバシー保護のため一部変更してある。なお、発話の文字中の「[」と「]」の重なりは発話の重なりを示している。また、( )内の発話は会話相手の発話である。

#### (1) 話題の発展の不足

〈会話例1〉 NS 1とSLS 1との会話

- |   |       |   |   |
|---|-------|---|---|
| 1 | NS 1  | : | あとね、昔、野球少しやってたのね。で、(ああ) だけど、コントロール全然、[悪くて |
| 2 | SLS 1 | : | [やっぱ]                                     |
| 3 | NS 1  | : | 一応ピッチャーだったんだけど、投げたけど全然だめだったのね。            |
| 4 | SLS 1 | : | <u>じゃあ、野球とサッカー、どっちが</u>                   |
| 5 | NS 1  | : | 今はサッカーが好き。                                |

〈会話例2〉 NS 1とSLS 2との会話

- |    |       |   |                                       |
|----|-------|---|---------------------------------------|
| 10 | NS 1  | : | 結局予選敗退。あれもびっくりしたよね。                   |
| 11 | SLS 2 | : | <u>ええ。</u>                            |
| 12 | NS 1  | : | パティストュータとか、あそこらへん絶対活躍するだろうと思ってたんだけどね。 |
| 13 | SLS 2 | : | <u>はいはい。</u>                          |
| 14 | NS 1  | : | やあ、びっくりしたなあ。(1秒)                      |
| 15 | NS 1  | : | で、実際にサッカーとかしますか。                      |

NS 1はSLS 1との会話で「野球とサッカーどっちが好きですかって、ただ聞いているだけじゃなくて、反応返してくれるんで、こっちとしても会話をつなぎやすい」と述べた。実際の会話でも4で話題が発展して、5以降も同じ話題が続いている。一方SLS 2との会話では「こっちが話題をふっても、ちょっと終わったりするんですよ。だから、また新しいも

のを投げないってというのがあるんですよね」と述べている。会話でも11、13のようにSLS 2は「ええ」「はいはい」という返答しか返さず、話題が発展していない。さらに、14でSLS 2の返答がなく話題が途切れて、15で母語話者が新しい話題を提示している。

## (2) 接続詞の欠如

〈会話例3〉NS 4とSLS 7との会話

- 1 NS 4 : 今、どこに住んでいるんですか。
  - 2 SLS 7 : 北A条、西B、アパート、アパートで。H病院の前。
  - 3 NS 4 : ああ、そうか。いい場所ですね、近くて。
  - 4 SLS 7 : あの、学校は遅い。
  - 5 NS 4 : 僕?
  - 6 SLS 7 : 私。毎日毎日、あの
  - 7 NS 4 : 何時ぐらい?
  - 8 SLS 7 : うーん、23 (ふーん) 22、23 [時ぐらい。
  - 9 NS 4 : [ずっと、開いてるんですか、学校は。
  - 10 SLS 7 : 実験がたくさん。
  - 11 NS 4 : ああ、そっか。農学部の菌類だから、実験なんだ。
- ポーズ—

上記の会話のように、母語話者NS 4は4の発話の意味がわからず、5で確認をしている。これは4が前の2や3とどういう関係なのか予測できないからであると考えられる。さらに、母語話者の9の質問にL 2話者が答えていず、11の発話の後に会話が途切れ、コミュニケーションが円滑に進んでいないことがわかる。

## (3) 発話の停止・重なり、あいづち

〈会話例4〉NS 5とSLS 9との会話

- 1 NS 5 : 東京とか、大阪に行ったら、ほんとに東京っていうのは国際都市なんだなあって。
- 2 SLS 9 : そうですよ。
- 3 NS 5 : すごく思うんですよ。

- 4 S L S 9 : チャンスがいっぱいありますからね。  
 5 NS 5 : そうですね。日本は不景気だけど、それでもまだ  
 6 S L S 9 : そうですよ。  
 7 NS 5 : 魅力があるのかもしれない (はい) ですよ。  
 8 S L S 9 : 外国人にとっては、ものすごくいいところですね。

〈会話例5〉 NS 5 と S L S 10 との会話

- 10 S L S 10 : 日本料理はできる料理は、カレー  
 11 NS 5 : カレー。お味噌汁  
     [とかは？]  
 12 S L S 10 : [カレーとか、あとは、焼きそばしかできない。やき  
     そばは簡単です。  
 13 NS 5 : はい。野菜とかは？ [野菜、代用するんですか。  
 14 S L S 10 : [同じ野菜、  
 15 NS 5 : [私、カナダ行ってたとき長ねぎがなかったから、グ  
 16 S L S 10 : [安いものがあつたら、  
 17 NS 5 : リーンオニオンというのを使って、ねぎの代わりに湯  
     豆腐の中に入れてみたりしたんですけど。  
 18 S L S 10 : うん。野菜は同じもの、もあるんですね。

母語話者NS 5は、S L S 9に関して「あいづちの感じとかがすごい」と述べ、話しやすさの要因として挙げた。実際の会話においてもターンテイキングがスムーズで円滑に会話が進んでいる様子が伺える。一方、S L S 10との会話では「会話がだぶつちやつたり、一緒にひいちゃつたりする」と述べた。10のカレーで母語話者は発話が終了したと思い、ターンを取り、11の発話を始めたが、L 2話者の発話が終了していないことが12の発話でわかる。また、13で母語話者が「野菜とかは？」と質問しているが、返答がないため「野菜、代用するんですか」とわかりやすく言い換えをしようとして、返答しようとするL 2話者と発話が重なっている。共に会話を作っている様子が伺えず、会話が円滑に流れていないことがわかる。

5.4 インタビューと実際の会話の分析のまとめ

インタビューを分析した結果、母語話者は会話しにくい、しやすいか

という点に注目している可能性が示唆された。L2話者の日本語能力が低くても、予測や推測できれば、コミュニケーション上困難さを感じていないようである。また実際の会話においても「会話しにくい」と母語話者が述べた場合、円滑に会話が進んでいない様子が伺えた。

## 6. 考察

### 6.1 会話直後とビデオ視聴時での評価の差をもたらす要因

分析結果が示すように、会話直後とビデオ視聴時で印象に差が生じた。この原因は、母語話者が無意識のうちに(1)自分自身の補足的な発話及び頭の中での推測、予測、補足を行って会話を進めている、(2)L2話者の発話に加え、非言語表現を利用して理解をしたり、推測、予測を行ったりしているからであると考えられる。このことから、会話時には聞き手であっても、L2話者の発話を受動的に聞いているのではなく、言語表現、非言語表現を利用して補完的作業を行い、話し手であるL2話者との会話を積極的に構築しようとしていることがわかる。

### 6.2 会話のしにくさに関わる要因

プロトコル分析及び会話の分析から、母語話者は文法・発音・談話構成のような個別に分類した項目に注目するのではなく、話しやすいかどうか、つまり円滑に流れるコミュニケーションかどうか注目していることがわかる。会話しにくさに関わるのは次のような要因と考えられる。まず、提示された話題に対して返答しかない場合、流れが止まって話題が断片的になり、会話しにくさや流暢さの欠如の要因となる傾向にある。次に、接続詞の欠如は、母語話者にとって後続の発話が予測できないため、会話しにくさにつながっている可能性がある。第三に、発話の停止や会話の終結の不明瞭さは、L2話者の発話が終了したのか継続するのか推測できないため、会話しにくさにつながると考えられる。第四に、相づち・頷き及び表情の不足・欠如は、L2話者の理解の程度及び話題に関する興味の程度を推測する手掛かりの不足、あるいは理解や興味の不足の表明に繋がり、会話しにくさを感じるようである。第五に、発音に関しては、不明瞭な発音があっても確認できたり、推測できたりする程度の数である場合、コミュニケーション上問題とは感じていない。だが、数が多くなると意味の推測ができなくなり、コミュニケーションに支障を来すようである。

以上まとめると、会話しにくさに関わる要因は、三つ挙げられる。まず

L2話者の発話及びターンテイキングの予測、推測をしにくくする要素である。例えば、次に続く発話の予測に関わる「接続詞」、ターンテイキングに関わる「ポーズ」、「談話の終結の不明瞭さ」、発話内容の推測に関わる「多数の不明瞭な発音または誤った発音」などである。次に理解や興味を推測しにくくする要素、「表情の少なさ」、「傾き、相づちの少なさ」などである。最後に、会話を継続させるための話題の発展が不十分なことが考えられる。

### 6.3 母語話者が捉える会話

以上2つの考察を総合して考えると、母語話者はL2話者が発話した日本語自体に注目しているのではなく、L2話者を共に会話を進める相互補完の相手としてみなしていることが推察できる。ここで「相互補完」とは「円滑なコミュニケーションの遂行という一つの目的のために会話参加者がお互いに助け合い協力して共に会話をする」とみなす。なぜ相互補完なのかというと、母語話者は、L2話者とコミュニケーションを行っているとき、無意識のうちに言語表現、非言語表現を利用して、補足して会話を遂行していること、そして同時に円滑なコミュニケーションを遂行するために、L2話者に会話を補足し合い、共に会話を作っていくことを求めていることがわかったからである。本研究でL2話者に求めている補足とは、推測、予測しやすい発話、非言語表現であり、話題の発展であることがわかった。

日本語教育の現場では、コミュニケーションを会話において発話される日本語だけではなく、相互補完に必要な予測、推測可能性という観点からも見る必要があるかもしれない。特にL2話者は、必ずしも全員が母語話者のような日本語運用能力の獲得を望んでいるわけではない。そのため、母語話者との比較で不完全な日本語話者という捉え方ではなく、相互に補完をして会話を遂行する相手として捉える視点は重要である。例えば、機能重視の会話練習ばかりではなく、気持ちよく円滑なコミュニケーションを遂行する目的で、母語話者と、またはL2話者同士で一定時間自由会話を行い、相互に補完が行われたか検討する教室活動も一つの方法かもしれない。しかしながら、現段階においては教育現場への提言は漠然としたものにすぎない。L2話者の発話の予測、推測、ターンテイキングの予測などが、どのような要素によって行われているか、研究を進めていくことが必要である。例えば、接続詞は次の発話を予測するための手掛かり

としているだけでなく、L2話者の発話の継続、話題の継続を予測する手掛かりになっている可能性もあるわけである。

## 7. おわりに

本研究では、母語話者が2名のタイ人L2話者と会話を行い、評価するという手法を採用した。そのため、2名のL2話者との会話に現れた部分に関して、母語話者の注目した要素が評価として現れているとも言える。したがって、会話に出現しなかった部分、L2話者2名の相違が小さい部分に関しては、評価として反映されていない可能性がある。また、L2話者がタイ人に限定されているため、タイ人特有のコミュニケーションスタイルが存在して、それが反映されている可能性も否定できない。しかし、コミュニケーションに関わる要因として、会話を相互補完作業と捉え、推測・予測性を考える必要性を提言できたことは、重要な知見であると考えられる。今後は、会話における相互補完のしやすさとは何かを追求していく必要があると考える。

追記：本研究は、科学研究費補助金基盤研究(B)(2)「日本人は何に注目して外国人の日本語運用を評価するか」(代表者 小林ミナ、課題番号1280058)の助成を受けた。

## 参考文献：

- 石崎晶子 (2000) 「学習者の言語行動に対する母語話者の評価」、『第二言語としての日本語の習得の研究』第3号、pp.19-35
- ウヴェ・フリック (2002) 「半構造化インタビュー」、『質的研究入門—人間の科学のための方法論』小田等訳、春秋社、pp.94-121
- 河野俊之 (1999) 「日本語母語話者は学習者の日本語音声はどう評価するか」、『第四回国際日本語教育・日本研究シンポジウム』(於香港理工大学) 発表資料
- 河野俊之・小林ミナ・小池真理・原田明子 (1999) 「学習者の音声はどのように評価されるか」、『日本語教育方法研究会誌』6-1、pp.18-19
- 小池真理 (1998) 「学習者の会話能力に対する評価に見られる日本語教師と一般日本人のずれ—初級学習者の到達度試験のロールプレイに対する評価—」、『北海道大学留学生センター紀要』第2号、pp.138-155

- 小池真理 (2000) 「日本語母語話者が失礼と感じるのは学習者のどんな発話かー「依頼の」場面における母語話者の発話と比較して」、『北海道大学留学生センター紀要』第4号、pp.58-80
- 小池真理 (2002) 「日本語母語話者は第二言語話者との対話をどのように評価するか」、『平成14年度日本語教育学会第9回研究集会』(於北海道大学) 発表資料
- 小林ミナ (2000) 「「何を」教えるかの再吟味へー日本人評価研究の意義と限界ー」、『北海道大学留学生センター紀要』第4号、pp.149-159
- 西郷英樹 (1998) 「日本語学習者に対する日本語母語話者の印象ー「断り」と「要求」という2つの言語行為を通してー」、『平成10年度年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、pp.39-44
- 原田明子 (1998) 「一般の日本人は学習者の日本語をどのように評価するか」、『北海道大学留学生センター』第2号、pp.157-185
- 原田明子 (2001) 「日本語レベルが異なる学習者の言語行動に対し母語話者による評価に違いが見られるか」、『群馬大学留学生センター論集』第1号、pp.51-59
- 深尾百合子 (1996) 「工学部専門教官による留学生の会話能力評価」、『平成8年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会、pp.238-243
- 渡部倫子 (2001) 「日本語母語話者は学習者の流暢さをどのように認識しているか」、『2001年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、pp.139-144
- 渡部倫子 (2002) 「日本語口頭運用能力をどのように評価するかー評価者による評価基準の違いー」、『2002年度日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会、pp.179-184
- Okamura, A. (1995) "Teachers' and Nonteachers' Perception of Elementary Learners' Spoken Japanese", *The Modern Language Journal*, 79, pp.29-40

こいけ まり (留学生センター非常勤講師)

## How do Japanese native speakers evaluate conversations with non-native speakers ?

Koike Mari

This study examines how Japanese-speaking participants evaluate non-native speakers' performance in conversations. In this survey semi-structured interviews, initial with non-structured questions, were employed in order to exclude the investigator's viewpoint as much as possible.

Analysis of native speakers' protocols showed the following results. Japanese native speakers tended not to pay attention to individual items of grammar, pronunciation or and discourse structure, but rather to elements which impede fluent communication. These were pointed out as (1) "conjunctions", "pause", "unclearness of closing topic" and "many errors of pronunciation" which induce difficulties of inference or prediction, (2) "expressionless faces" and "lack of reactive tokens" which make native speakers uneasy, and (3) "lack of topic development". It appears that native speakers consider non-native speakers as complementary co-participants in conversations, and perform communication with them using all sources of information which they provide. In other words, it seems that native speakers tend to feel difficulties of communication with non-native speakers in relation to elements which impede the work of complement.